



粹
宇
瑠
璃

壹

13
203
1



白宇雷理後篇
くろうるま

全部五冊

書林 賭春堂
崇高堂

く路宇雷理

客尔物者客者女女深深矣矣尔尔公公

ああんん者者圖圖居居ああるる路路様様とと終終

もも果果びび取取珍珍物物織織たたままかか

尔尔たたはは祿祿しし尔尔是是ををじじ 糒糒



13
2703
卷



粹字留理卷一

いぞきのゆんと宛するまらん北山の業寂僧の
ありしをそりりたる何げの縁除と名或寂莫
よいげくともなぐ異人ききりて思見鏡といは
るものとりづけい色に物々ありて思見鏡といは
る物の縁を去るを黙れとふの陰り平合とらるまでを
か免はくさるし一が辰宿命まふ月人のあしをりて

三十一 五

社内権蔵

う め ありと 日 尔 満 の 事 こと
あ り あり

ろらまろ 盧橋庵系系江南
結大度寺系系

宇宙より星ばかりも織女のことさまの初夜流星の抜
足彗星のこゝれ迫るまで見えてぬぬぬらふなりた
くひて祿師も星といふものいふまじり金砂子前
中うちものと思ひのおたよあぐん元来星の宿の落
あかななり。そ穴よりお側の日乃新れ漏れ出るとを
くろくしん益いんまぐん又宿の夜ハ星の穴入用を祝まぐ
勿海星も大小のまぐんゆまぐららがりけぬなぐまぐ
是が別きてあかの核子のまぐらり。祿師はくぐ

おをらるまぐらるへ是まを見一造化の分いん不男の
あかななり。あまより方おの優者なれば浮世のまぐり
たどく一後の世語おそや
昭代の化よわらる。民間の作りと見えやと南とをる
くまながしむばらしても目も度々の秋津洲や小根針月
よそ兼まぐる。堯舜のゆけり芳流にらむをいせん
削げとらこそしむくとはれ居るものもでたか今
らの作りおまぐらるいんもく様か一が有まると白菊

病おとろとて嘆息とるぞおろし流り不憂の
 ようたり敷人も定なるべしと人をもとと云を
 せしごとくまもりのとほしくくたせし中くやと伝
 人が涙ふおよ米穀の下直ぐめがめだの印とひり
 玉し天神のこんちやうう入なきバ親善の大脚よきて
 中へ坐座の稲あよげきけなごうおの幸不憂
 の神仏よてありは只ことの振るるひさまでなだ
 糸のたど振るりーのりやけれんくひ空祖又が

出来て本戸男の女あひ町掃およりも見ゆなり
 考限の短おありがめしと神にが板の口ぬしやうみ
 弟尺濡半物申の孫男の備へ項と若女のこげと
 親よ有分指し者愛を朝とほし孫所町は法
 屋名のもめさう法飯へと角よなり拙飯の焼賣
 へに角よ定すなり大寺息志書出ー醫師砂魚病の
 としは倣仇名は死熱嫁よ若らへいらく女の名へさ
 たりー操芝居の看板へ及古むりのやうよせ移む

けり申は演るぞ力の役なれ居客へ炊女がよろこぶ
居格へ下り上へはとものりなりしはら一
のまじりの男あいの好味線より替り
皮のちと裁たも合張をけら物しして居
を半の上もかたと夜にやもよがそれとてまで
枕よなるまじごと昔思ひての業ぐ文園の景
のほりも町垣の垣板とる中か京譜のきこも
相舊追付海ぬ理申と藍水湯の映り入ぬか

斛申大字五の義解をうか種の後下る度紙
どりのよ翻刺ゆるは里必究と刺とすか
小息をと養ふは沙登ぬかといて合点せぬは
方子あやといてせうは候も豆磨も切も
あせばかり表服をう遠路暮新追の接
お指を正のくか計りては板りして海へ
人相見の書付が存よこの所出とてりか
牡丹や祇園守の級あれはのりか

花子川のうらぬ物ハ言法が内職は出来ぬごりの
中よりなりて瓢箪町の二階造りよなり位なり
うちでいふ一画数のうらぬでと一のほを終りしとハ
律呂が欲のうらぬなり。主願お粉お舞はしとくお
魚よで先道きいぬよ。よしく才は舞下よなり
と思ふなり。今の世の青巻のほくらや二十ハ肩作
と筆先であかき一ぬとらぬのや紙二の釣書おの
ひり。是やお玉のうらぬと女の紀原とくやその時がい

顔頰の裳。目深の外。時勢権柄とそもなく。福深
急びを先とらぬと色など古雅にゆるなりぬと。
そのしたの髪はく。又そおひでなり。今のそれ
中町の婦人の風俗も。おとらぬ仕里の婦人と摸す
中よりなりぬ。并にさびまは鼻のうらぬ。
町中とさびまを底よおんと古言のうらぬ。
半合おきせて。おの者おりて。供よおとらぬ。
おのぬき。文字も底にて。おとらぬ。



大
木



大
木

五

能子むんは捲いそがたとやうさうい内奉の裏結せきむす留とど
へいあええ小娘のとんがへつれづれ雛妓ひなよりよさやうなり。
たのみさでとも紙かみらひり申まをりきて大坂おおいせのこ
でさざうういで遠出とんの小女こめ童わらわかともやうら緋梅ひうめ小娘こめよりさあ
統たうのへん襟へりまもひり織あ紋りと柄す込まげくそへへららた
ん。松まつ金かね油あぶらでないと天窓あまぬまがかけるとサされまきたる長ながの白しろと
い小袖こそでの裏うらまもへい。糸いと色の紅べに形かたち成なりひ身元みもと結むすお株くさを
ゆゆる下女げぢよが隠かくし男おとこの裁人さいじんと云いふまさくるとんとんとた湯ゆの

着きる物入ものいれのごとく。ここま月つきのなりららの道みちをなんを
みじんみじんの青梅あやめ結むすのうら整ととのとけ靴ぐつ田でんの物ものなん成なり
夜素よらそ人ひとがごとよああひひささのなかか。食かうははととととれれが
ななりりでももああいいののああののああ。ああののああののああののああののああ
ぢぢののああののああののああののああののああののああののああののああののああ
ううら仕し度どをを見みく。初はつ見みくく物ものををとと火ひのの中なか水みづの
ななををとと焼や豆まめ層そうののちちかかああひひせせららふふああののちちかかととああののちち
見みるるううささ色いろ六むろ版ばんををききゆゆりりはは用もちるる茶ちやががららりりののううをを

直取入舞子来て呉りぬ。綱がところへ付さるるばけ
あるく叔母一病だうらむるもなかりぬ。よむい
人むことおやの利刀杖うらうら。の次お女の
くあどらきよのなり抱の親の娘が東の門高貴
のの娘がきてとる嫁入るといふとた身おすい初
よみてのくれ。おア。そのおとらぬのこんど付
おや取の婿原でもかひざんて。と。祇園町うら。その
舞子いど。お母のく。おやい。か。い。と。あ。孫

女は。い。い。が。あ。れ。い。い。の。ま。ま。い。い。だ。あ。れ。あ。れ。い。い。が。ア
と。い。む。ア。ア。ア。ア。ア。ア。い。い。い。い。抱。く。ぬ。病。も。せ
ぬ。男。の。新。し。い。生。涯。嫁。入。て。久。と。肝。は。ぶ。せ。い。よ。も
似。は。ま。岳。の。棧。あ。や。ま。が。ま。い。い。危。を。れ。で。志。願。袋
く。い。境。え。出。し。何。迄。と。か。く。海。を。越。す。け。つ。た。る。と。い
大。き。ふ。と。ら。あ。ら。な。り。と。な。夜。河。津。池。の。用。状。い。
縁。起。親。と。て。お。や。息。子。ら。い。よ。し。男。あ。や。と。い。で。ら。い。か
と。あ。や。せ。い。い。ひ。く。と。と。是。清。い。と。い。ふ。と。あ。の。ま。い。い。

旧記は肝が子おやとありしも。今の豪傑が子おやと
 云ふ方へまきり見えたのゆゑをく見る候は、たのふり
 天正月積といふその出来ぬ是の紙とや紙の役
 までゆきまじりし形まじりの模写とかん。ゆゑに先ごまらふ
 くりぬいおせり。ゆゑに任女がどあぶらたをのいじ。
みけり 龍波の鯉へ伊勢名者すて夕く息けり化けりり。まがの物
 志まかひまめぐるれど流まとま方ま身まへま押まのまくまたまがまドまの
 ぐくとぞは頂たある任女今所の息い子ことありくまは

ともとのとゆゆななどどねねんんごごろろよよううららるるららいいららいいおおくくらら去
 丈じ長ちああとと身み張ぢの相あ模まゆゆの附つ金げもも返かるといふ被ひ女めら
 男おととままねねささ右みののああいいままとと治ちアア亦また日ひりりをを月つきををど
 志しんんががううああとと岳たけ也や。音ね室むろううははいい抜ひきき来きややどどり
 とといいふふはは彼かの男おとこ。才さいととははままてて人ひとののいいららどどととままれ
 たりと。義ぎ法はうのの古こ年ねんをを思おもひひかかてて女めおおよよじじひひて
 ららいい一ひと方かたととももいいひひとと町まちはは伊い勢せははままりりとと是こううとと
 ばばああららひひてて何なにととああららひひとといいふふひひたたふふららいいか



そきも二面ちておひ。私が此の道々でも二十あや
に控あひ又是よよひて。是とを性うしてたり。ろ
ぢくの宥遠やうといふもぞいよくあつるをちて
猫紙袋と稱らるる。よふまの合長名。のけむ
長者が臥人者といふその名や。そふとも出世れぬ
名りりもたゞはなごいそのりもたよふ。其見志く
その年限は離縁てあまふ。女而ひあやがりして
版とたぐ。そんちううどうい。いそ人彼是りてゆ

せんゆが邪テになつて。身後があやこてははす。いぬ
あなよアようそんちう情か。と。今文をよれ。この名
そふ名今夜の且形るよそふ云て。おああの町は家
買てそふて。常住おまよ。付て叱く。こす。こと。は
い笑よ。抱女の持ま。根性あ。へ。ま。氣で。く。も。を。試
夜の初若よ。あ。だ。林の表で。脊のび。女でも。限増あ
年限の延。女。ま。だ。後。よ。の。弁。枝の。尚。齒。舎。や。婿。婿。の。契
振舞。入。齒の。袂。摺。附。く。こ。え。の。袖。詰。も。今。の。ま。あ。る

べつに叔京しゆくけいにのかりし一醫いの書しよ生せい吉田きちだれ一宗そう宿しゆく
 智ち積じきの察さつ侶りよとて帝てい起きの風ふうあれ薄はくらうふを花はな
 海うみのこ人ひと志しきう。又また信しん不ふ付つ安あんにはきる。魂たまげ消けうしるのまらうに
 て一動どう身みのあぬらちの突とつ祈せいまて然しか星せいといまをたて溝こう
 席せきへ出たら更さら團だんるまと机あらく一且かつ苦くの自炊し珍ちんはらく
 四しの備在ざい安あんに尿瓶びんすを係かしと申まを。國くに元もとより仕送しやう
 金かねと延しる婦ふ人にん祖そ父ふの代らう。其その證しやう治ち準じゆん繩じやうや昔今こん
 醫い統とうもおてるはらりの隊たいを日々じやくほくがは店てんに酔を一

僧そう一一。双しやう林りん寺じに胡詠えいをく。故こ哲てつの墳墓ぼに懷舊きゆうの後
 とそとぐ。貝かい原げんの名亦い記きと見て一。急いとせね古跡せきとあがし。
 夕ゆふぐの五ご糸いとあたりまて古こ子し屋やの右にく。王おう用ようをげ
 なら兵へいは死にて代だいとんで出何なにの利せとと一。ババツツ列れつの義
 でいあらうらぬ揚名めいと知がとありの。米こめ播は春はるのこをくと
 安あんえし米こめ屋やへ何かてはら店てん中ちゆうといふ一。子し代だい別べつの事をて
 天あま宗そう死しくそれの米こめのこがち憂うれれ也。一一。月つきであるこ
 ぎぎといつた。夫おより法成せう寺じの跡ハ川原はらの東。之これ糸いとの水

まで後寛が住まへ今の北田院の邊り。新南祿の
 月橋姫の言頂妙ちあ檀王後の衣風舟す。水梅花
 の白へ附家の相合場より芳がしく小女良が垢付し布
 子へ代脈の病衣おどじさる。そろく薪炊の芳も
 ひりりしく。常煮も十日げり洗。夜食の念人
 の麵粉がら。星舗で買し石刻。米元章とゆを
 見。滄溟尺牘限の牙袴で。怪文と好。小海先生東
 脩とおあ。詩といら。五七絶の漏費が。考ら

出来ると日か詩選は性氏のとんるゆと愛し。あ
 り芳品を号し。丹波屋は丹丘と題と。二夜よび
 平波とお減と唱。掛初燈は董玄昌とあ。ゆ
 出来ぬ新楽曲と休。平日偶日の。ちちなく。送
 と。夢て。うま。あ。と。まの。悪。り。と。なり。生。涯。傷。を
 編の未書と著述せん。と。わ。の。に。劉。氏。傳。と。談。て。名。數
 解と。と。ん。ご。り。身。ん。ち。る。見。識。の。な。く。み。ち。る。に。れ
 し。失。く。な。り。ご。ま。ら。あ。あ。あ。醫。術。も。斬。枿。の。や。う。よ。

庵にたりよくま賢すのいざ時をよう人真の首うぶといふよ
 といと身みとにたりい。夜よ松まつ口くちらいよい先生せんせい家けやい世よ活かつよいなり
と國くにのい間まをい崎さきをいなりいふいぬいふいまいといぬいるいのいまいらいひいけいと
いらいるいのいへい下くだまい河か町まちのい茶ちや屋やのい姥おばがい儀ぎ別べつよい書か出し出しるいを
いふい所ところむいりいるい。室むろらいのい若わ衆しゆといもいいいふいがい史し教きやうよい委い
いぬい。とい色いろのい門かど人ひとよいのいまい次つぎしてい。且ま儀ぎといらいるいぞい。仙せんが
いたい。又また或ある茶ちや人ひとのい鶴つるとい闘たうしいたいらいるいぞい。逸いつ氏しのい癖くせよいお
いふいらいるいりいをいとい一いつ巻まき いがいはいりいをいぬいのいどいれいをいり

